001

写真展のパネルを前に（左：写真家 ジュニオル・マエダ氏、右：本学卒業生の日系ブラジル人 岡崎ケンジ氏）

イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費：500千円

「デカセギ」の30年、過去から未来へ ～写真展、シンポジウム、交流コンサート～

目的・趣旨

在浜松の日系ブラジル人写真家ジュニオル・マエダ氏が撮影した写真パネル90枚を通して日系人「デカセギ」の30年を振り返り、新たな外国人受け入れが始まる日本社会におけるブラジル人コミュニティの今後を考える。

日時・場所

2019年10月26日から2019年11月4日
静岡文化芸術大学（西ギャラリー、南176大講義室、講堂）

体制

（実施代表者）	文化政策学部	国際文化学科	教授	池上 重弘
（実施分担者）	文化政策学部	芸術文化学科	教授	立入 正之
	デザイン学部	デザイン学科	教授	峯 郁郎

共催・後援等

（共催）　在浜松ブラジル総領事館、日伯交流協会

内容

写真展「デカセギ ブラジル 写真家ジュニオル・マエダが見た30年の軌跡」を開催し、ブラジル人労働者やその家族について、浜松在住の日系ブラジル人写真家ジュニオル・マエダ氏が30年間に撮りためた写真約90点を展示した。「日本におけるブラジル人コミュニティの過去と未来」をテーマにしたシンポジウムで、1989年12月の入管法改正による日系人の就労合法化以降30年の足跡をたどり、変化した点と変化していない点を明らかにした。また、赤津ストヤーノフ樹里亜さんによる「郷愁と希望」と題した日伯交流ピアノコンサートでは、最後に日本の子どもとブラジル人の子どもが、赤津さんが作詞作曲したオリジナル童謡を日本語、英語、ポルトガル語で合唱した。

ブラジル人パネリストを迎えた
ディスカッション

「お気に入りの１枚」を
アンケートに記入する来場者

結果・成果

写真展は在浜松ブラジル総領事館と本学の共催による初めてのイベントで、日本人のみならず多数のブラジル人が来場した。自らも「デカセギ」労働者だったブラジル人写真家が30年間に撮りためたモノクロ写真約90点は一般の日本人はなかなかうかがい知ることができない日系ブラジル人の就労や家族生活を生き生きと伝えるもので、来場者の共感を呼んだ。
シンポジウムでは、ジュニオル・マエダ氏（写真家）、児玉哲義氏（日伯交流協会副会長、世界武士道空手連盟 魂誠會館長）、アンジェロ・イシ氏（武蔵大学教授）の３名の日系ブラジル人が池上の司会のもと、1989年の入管法改正以降の30年を振り返り、定住化の進展にも関わらず、就労形態では依然として間接雇用が多く、不安定な生活基盤の上で移民化していることが明らかになった。
ブラジルで音楽の専門的教育を受けたピアニストによって日本ではあまり知られていないブラジルの音楽が紹介された。最後のオリジナル童謡では、日本人の子どもたちとブラジル人の子どもたちが大学生のサポートを受けながら、互いの言語も交えて合唱することを通して多文化共生の理念を具現化する機会となった。

創作童謡を歌うブラジル人の子どもたちと
本学のブラジル人学生

コンサートを終えて、観客に手を振る
子どもたちと本学学生